

彩の国さいたま芸術劇場 前編

一九九四年十月、埼玉県さいたま市中央区にオープンした「彩の国さいたま芸術劇場」。優れた舞台芸術を創造し、上演するために、演劇、音楽、映像などに適した専門ホールが誕生した。前編は埼玉県が劇場を計画した経緯と、建築家・香山壽夫氏がまとめあげた劇場空間を紹介する。



劇場を訪れる一般客と、俳優やスタッフなど劇場関係者が往き来する「カレリア」。街の中の通りのようだ。

シンボルタワーに導かれて
芸術劇場へ

東京都内からJR埼京線で北上し、与野本町駅に降り立つと、ホームから見える街並みの間から、一直線に「彩の国さいたま芸術劇場」のシンボルタワーが目飛び込んでくる。このエリアのランドマークだ。芸術劇場は一九九四年十月にオープンしてから二〇年を超え、上質の舞台芸術を提供する公共劇場として知られる。近年は演出家・蜷川幸雄氏によるシェイクスピア作品上演の本拠地として、熱心なファンが定着している。



劇場の外観。手前は音楽ホール。シンボルタワーの左手の大階段を昇り、ホールのエントランスが集まる広場「ロトнда」へ向かう。

建築に携わった三者（建築主・埼玉県、設計者・香山壽夫+環境造形研究所、施工者・間組、大成建設、八生建設）が第三六回BCS賞を受賞したのは一九九五年。県が用意した意欲的な建築プログラム、設計者が生み出した個性的で巧みな空間構成、それを実現した施工者の総合力の高さ、さらに運営についても触れながら、総合的に高く評価されての受賞だった。

舞台芸術を育てるために、
質の高い専門ホールを計画

「彩の国さいたま芸術劇場」の開設は一九七九年に県文化団体連合会から県知事宛にホール設置の要望書が出されたことから始まった。八〇年代には、音楽、舞踊、演劇などの専門家を招いて基本構想を検討し、具体的な計画がつくられていった。「そのころ、日本の公共ホールは転換期を迎えていました」と当時の状況を語るのは埼玉県営繕課の郡司高宏氏だ。「それまで自治体では『多目的ホール』といって、各種の行事や、芝居、演奏会など、何でもこなせる文化

施設をつくっていたのですが、どの分野にとっても機能が不十分で、市民に本当に創造性豊かな芸術に触れる機会を提供できないと気づかれ始めたのです。そこで八〇年代中頃から専門性をもつホールをつくろうという機運が全国的に高まりました。埼玉県もその流れの中で本格的な劇場づくりをめざしたんです。こうした流れには、八六年、東京で最初のクラッシック音楽専門のコンサートホール「サントリーホール」がオープンしたことも影響を与えたという。

観客とステージが
一体感に包まれるデザイン

「さいたま芸術劇場」の建築設計者の選定は一九八九年、候補者を指名して基本案やコンセプトなどを求め、ふさわしい設計者を選ぶプロポーザル方式で行われ、建築家・香山壽夫+環境造形研究所（現・香山壽夫建築研究所）に決定した。「埼玉県の建築プログラムはユニークで徹底したものでした」と香山氏が当時を振り返る。日本で有数の本格的な劇場とする

プランであり、芸術監督を置き「創造する劇場」として、舞台芸術作品を企画・制作する場をつくることが盛り込まれていた。そのための施設は演劇、舞踊、音楽、映像などに対応する四つの専門ホールと、合計一二室もの大小の稽古場・練習室、展示情報施設、資料室、レストランなどを備えるというもの。

まず、個々のホールが観客を引きつけずにはおかない。大ホールは演劇、ミュージカル、バレエ、オペラ、ダンスなどを対象にしている。芸術劇場のなかで一番大きいが、それでも七七六席と小規模だ。これは肉声での演技や、出演者の表情が生き生きと観客に伝わる理想的な規模だという。さらに、門型のプロセニアム形式の主舞台は後方と上手（向かって右手）に主舞台と同じ広さをもつ三面舞台で、下手（向かって左手）に主舞台の二分の一の広さをとり、演出の可能性を大きく広げる構成となっている。舞台機構や照明、音響設備も充実が図られ、つくり手の創意欲に応える。



左/クラシック専用の音楽ホール。
 右上/大ホール。江戸の芝居小屋と18世紀英国の劇場の形式が溶け合う(提供:さいたま芸術劇場)。
 右中/小ホールを使って、芸術総合高校の舞台芸術科の生徒が演習授業を行っている(提供:さいたま芸術劇場)。
 右下/シンプルなデザインの映像ホール。

クス型の音楽ホール、また、席数とステージ形状が可変式で、実験的な身体表現や創作などに使われる小ホール、一五〇席の映像ホールが揃い、多様な芸術表現をカバーする。

四つのホールがリンクする街のような劇場空間の魅力

「それぞれのホールに個性を与えたうえで、全体をどのような建築空間としてまとめるか、それが私たちの第一のテーマでした。そこで、劇場が集まっている街のようにならうと考えました」と香山氏が発想を語る。「たとえば、江戸時代の両国広小路と呼ばれたあたりは大川端(隅田川岸)の橋の袂にあつて、芝居小屋が建ち並んでいましたし、世界のいろいろな国には歴史的な劇場の街がいくつもあります。それを建築の中に取り込もうと考えたのです」。建築のコンセプトを知らなくても、芸術劇場を訪ねてみれば、街のように景色が開けていく魅力を体感することができる。

たとえば、正面の緩やかな大階

段を上っていくと現れるのが「ロトンダ」と呼ばれる円形の広場だ。大ホール、小ホール、音楽ホールの入り口が三方に設けられ、どのホールにも向かうことができる。上部はガラスブロックの壁に囲まれ、円筒形の空間が劇場全体の中心をかたちづくっていることがわかる。中央には光庭が設けられ、太陽光が一階の情報プラザへ差し込んでいく。

もう一つ、「ロトンダ」に加え、ホール群と稽古場をつなぐストリートのような空間を持つ「ガレリア」がある。ガラス屋根がかかった通路を意味し、絵などを展示するギャラリーの意味も併せ持つ



ガレリアに続く情報プラザの中央に、ガラスに囲まれた光庭が設けられている。

いる。大小の稽古場と音楽ホールの側面に沿って、まっすぐに約一〇〇坪の通路が伸びていく。上部は明るい吹抜け空間となっていて、圧倒的に気持ちがいい。一般には裏方に当たるエリアだが、ここでは表と裏を隔てることなく、誰でもガレリアを自由に通れることには驚かされる。毎日のように稽古場にやってくる俳優たちや制作スタッフと、まるで日常的に街角で出会うようなシーンがある。

香山氏は設計の最終段階で全体構成を煮詰めていったときのことを今もときどき夢に見ると言う。「それまでの考えがどうしても物足りなくて、ホールが集まっている形がもっと外にはつきりと見えるように、何とかしたいと思ひ悩みました。ロトンダを中心に、ガレリアが一気に接続していくかたちを考えついたときには、やった!という感じでしたね。夜の帳が降りる頃には、ホールの灯りとライトアップされたロトンダの光が溶け合い、密度の高いステージに魅了された人々たちを、ゆつたりと受け止めてくれる。

建築主より

関係者の力が大きなエネルギーとなり
 素晴らしい建築が生まれました



埼玉県都市整備部
 営繕課建築第二担当 主幹
郡司高宏
 Gunji Takahiro

平成三年に埼玉県の都市整備部営繕課に「県民芸術劇場」担当のプロジェクトチームが立ち上がり、私は建築工事をまとめる一員となりました。劇場を担当するのは初めてで、設計・施工の方々とコミュニケーションを取るには基本的な知識や観劇の経験なしには済まされないと、だいぶ勉強したものです。

香山先生と所員の方々の姿はいまでも鮮明に覚えています。先生は大学で教鞭をとられながら、週に一度は現場においてになり、調

整が必要な箇所を黄土色のトレッ

シングペーパーに色鉛筆で描かれると、それを所員の方が作図し、また先生がチェックするというキヤッチボールが続きます。常によい劇場をつくらうという一心で設計に打ち込まれている日々でした。

施工段階ではJVの川口所長が指揮するしつかりとした協力体制に支えられ、工事が進んでいきました。ロトンダの空間を一階で支える連続アーチをコンクリート打放し仕上げにしたときのことは忘れられません。コンクリートが型枠に流し込まれると、職人さんたちが型枠の外側を一齐に叩く音が響きました。コンクリートを隅々まで行き渡らせて、複雑な凹凸をきれいに仕上げるために繊細な注意が払われていたんです。

竣工を迎えたときは、いろいろな立場の方々が最大限の努力を払われた結果として、質の高い劇場ができたのだと実感しました。

設計者より

初心の大切さを思い起こす
 印象深い仕事です



有限会社香山壽夫建築研究所 所長
香山壽夫
 Hisao Kobayama

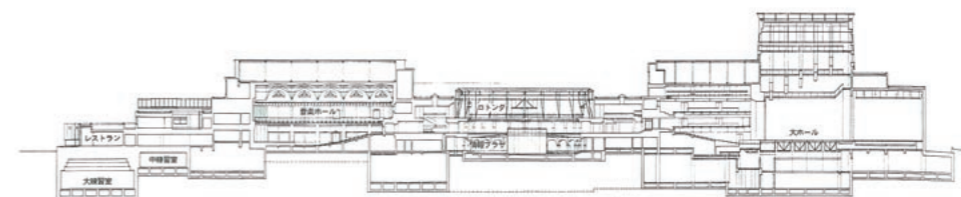
私にとって「彩の国さいたま芸術劇場」の設計は、その後の建築人生に新たな分野を拓いてくれた、忘れがたい仕事です。

当時はまだ大学で教職についており、あと数年で退官を迎え、建築設計に専念しようという節目に向かっていました。その時期に、プロポーザル方式で私を設計者として選んでいただいたことが大きな公共建築を手掛ける出発点となったのです。

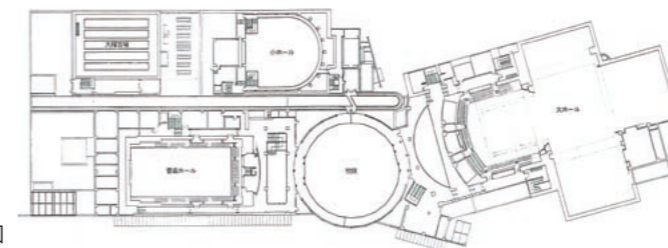
また当時はプロポーザル方式による設計者選定が採用され始めた

頃で、候補者は私の先輩に当たる方々ばかり。それまで私は劇場を設計した経験もありませんでした。そこで審査のときに、最初からはっきりと、「初めてだからこそできるような、今までにない劇場を設計したい」と申し上げました。それを受け入れてくださった審査委員の先生方に今でもたいへん感謝しています。その背景には、構想に携わった初代館長の作曲家・諸井誠さん、新進気鋭の劇場建築の研究者・清水裕之さん、知事をはじめ県の担当者の方々が、新しい公共の劇場づくりに挑戦しようという意気込みで臨まれていたことがありました。

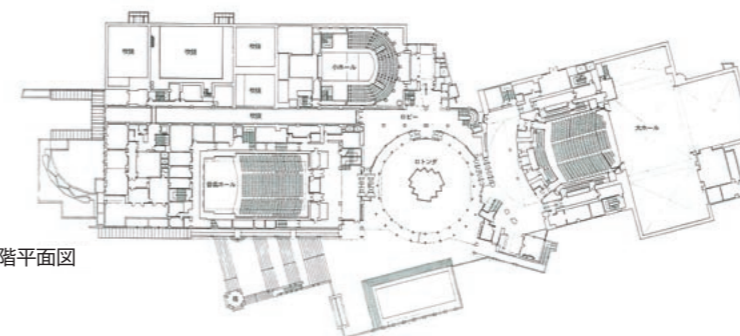
そのときの体験から、私が審査する立場になったときなどに、経験や実績といった最初のハードルはなるべく低くしようと言っています。未来のために若い建築家がチャレンジできる環境を大切にしたいと思っています。



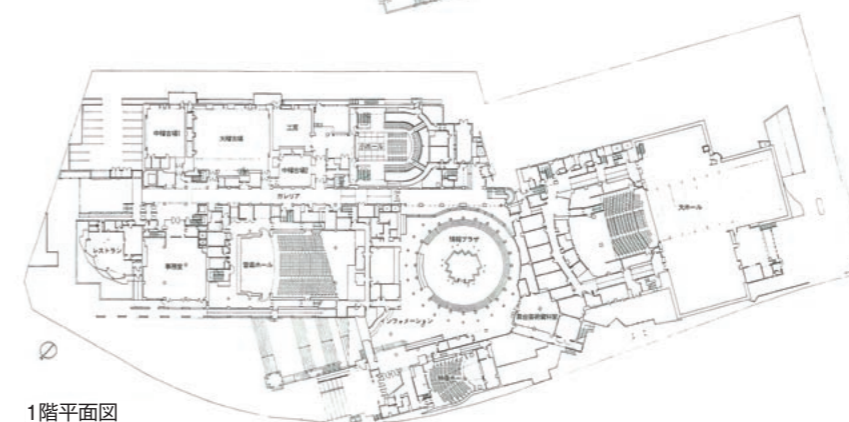
断面図



3階平面図



2階平面図



1階平面図

彩の国さいたま芸術劇場

JR埼京線与野本町駅西口下車徒歩7分。



計画概要

所在地：埼玉県さいたま市中央区上峰3-15-1
 建築主：埼玉県
 設計者：香山壽夫+環境造形研究所（現・香山壽夫建築研究所）
 施工者：株式会社間組（現・安藤ハザマ）、大成建設株式会社、八生建設株式会社
 竣工：1994年3月
 敷地面積：18,970.30㎡
 建築面積：10,713.81㎡
 延床面積：23,855.81㎡
 構造：鉄筋コンクリート造および鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
 規模：地下2階、地上4階、塔屋1階